

蘇東坡の悼亡詞について

中原健二

はじめに

蘇軾（一〇三六―一一〇二）、その号でよべば東坡は、宋代を代表する文人官僚で、詩詞や散文をはじめ、文学芸術の多くの分野ですぐれた才能を発揮した。その東坡に、次のような詞がある。

江城子

乙卯正月二十日夜記夢

十年生死兩茫茫 十年 生死 両つながら茫茫たり

不思量 思量せざらんとすれど

自難忘 自ら忘れ難し

千里孤墳 千里の孤墳

無處話淒涼 淒涼を語るに処無し

縱使相逢應不識 縱使 相逢うとも 応に識らざるべし

塵滿面 塵は面に滿ち

鬢如霜 鬢は霜の如し

夜來幽夢忽還鄉

小軒窗

正梳妝

相顧無言

唯有淚千行

料得年年腸斷處

明月夜

短松崗

夜來の幽夢 忽ち郷に還る

小軒の窓べにて

正に梳妝す

相顧りみて 言無く

唯だ涙の千行なる有るのみ

料り得たり 年年 腸断たるる処

明月の夜

短松の崗

これは明らかに、死別した女性への思いを歌ったものである。小題にいう「乙卯」とは、北宋の熙寧八年（一〇七五）で、東坡は知事として密州（山東省）にあった。そのちょうど十年前、治平二年（一〇六五）に、東坡は最初の妻王氏（通義君）をなくしている。そして、翌年、王氏は二人の故郷の眉州（四川省）に葬られた。⁽¹⁾ このことは、「十年生死兩茫茫」「千里孤墳」の句に対応している。したがって、

従来からいわれているように、この「江城子」が亡き妻を歌ったもの、すなわち悼亡の詞であることは疑いを容れない。

悼亡とは亡き妻を悼むことで、三世紀、晋の潘岳が亡き妻楊氏を悼む詩を「悼亡」と題したことに始まる。そして、潘岳以後、梁の沈約の「悼亡」、江淹の「悼室人」、北周の庾信の「傷往」、唐代では韋應物の「傷逝」等、元稹の「遣悲懷」等などを代表として、確固たる悼亡詩の伝統が形成されることとなった。⁽²⁾ところが、東坡には悼亡詩が見当たらない。東坡は悼亡を伝統的な詩ではなくて、詞で歌ったわけである。このことは従来から指摘されているが、それをどう解釈するかといえば、要するに、東坡はそのときの感情を最もよく表現してくれる形式として、詩ではなく詞をえらんだのだと考えられているようである。⁽³⁾これを換言すれば、悼亡という亡き妻を悼む思いを託す形式としては、詩よりも詞の方がふさわしいということになるか。また、さらにこれを進めて、宋人は悼亡というテーマを詩から詞へ移してしまった、という説もある。⁽⁴⁾たしかに、詞という韻文形式の本色は、男女の恋情を主とした純粹抒情詩であるという点にあることは動かしがたい。悼亡も妻への愛情の表白という点からいえば、詞の本色の領域に入るもののように見える。しかし、こと悼亡というテーマに関しては、そのような見方はできないように思われる。したがって、東坡が悼亡を詞で歌ったことについても、また別の見方をすべきではないだろうか。

(一)

潘岳以来の悼亡詩の伝統を、宋代において受け継いだ詩人としては、まず梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）が挙げられる。梅堯臣は東坡が科擧に及第したときの試験官のひとりで、かつ東坡の答案を高く評価した人である。ちなみに、そのときの主任試験官が梅堯臣の友人で、東坡が梅堯臣とともに師と仰ぐ欧陽修であつたことは知られている（欧陽修についても後に述べる）。

梅堯臣は慶曆四年（一〇四四）、四十三歳のときに十七年連れ添つた妻謝氏をなくした。以後、彼は「悼亡三首」以下、数多くの悼亡詩を作つてゆく。⁽⁵⁾梅堯臣は北宋の代表的詩人であるが、詞を全く作らなかつたかといえは、そうではなく、一首の詞（『全宋詞』に拠る。以下詞については同じ）が今に伝わっている。そして、その二首はいずれも悼亡の作ではない。わずか二首の詞しか残っていないので、もちろん断言はできないのだが、梅堯臣はおそらく詞の形式では悼亡を歌わなかつたと思われる。

同じことは、欧陽修（一〇〇七—一〇七二）についてさらにはつきりといえる。欧陽修も明道二年（一〇三三）、二十七歳のときに最初の妻胥氏に先立たれているが、⁽⁶⁾彼の場合も、やはり「綠竹堂獨飲」と題する悼亡詩が残っているのである。⁽⁷⁾一方、欧陽修は詞においても北宋の著名な作家のひとりで、二百首を越す詞が今に伝えられている。この数は宋代の詞人の中でも多い方に属するが、その中に悼亡と認められる作品は見当たらない。欧陽修もやはり詞ではなく、伝統的な詩の形

式で悼亡を歌っているのである。

次に、曾鞏（一〇一九―一〇八三）も嘉祐七年（一〇六二）に二十六歳の妻晁氏をなくしているが、やはり悼亡と認められる詩がいくつかある。曾鞏の悼亡詩はあまり知られていないと思われるので、いまそのひとつを挙げておこう。⁹⁾

秋夜

秋露隨節至	秋露 節に随つて至り
霄零在幽篁	霄に零ちて幽篁に在り
瀨氣入我牖	瀨氣 我が牖に入り
蕭然衾簟涼	蕭然として衾簟涼し
念往不能寐	往きしを念い 寐ぬる能わず
枕書嗟漏長	書に枕して 漏の長きを嗟く
平生肺腑友	平生 肺腑の友
一訣餘空床	一訣 空床を余す
況有鵲巢德	況んや鵲巢の徳有りて
顧方共糟糠	顧みれば方に糟糠を共にせしをや
偕老遂不可	偕老 遂に可ならず
輔賢眞淼茫	輔賢 真に淼茫たり
家事成濩落	家事 濩落と成り
嬌兒亦徬徨	嬌兒 亦た徬徨す
晤言豈可接	晤言 豈に接す可けんや
虛貌在中堂	虚貌 中堂に在り

蘇東坡の悼亡詞について

清淚昏我眼	清淚 我が眼を昏くし
沉憂回我腸	沈憂 我が腸を回らす
誠知百無益	誠に百も益無きを知れど
恩義故難忘	恩義 故より忘れ難し

（元豐類藁卷四）

この曾鞏も詞を全く作らなかつたわけではなく、一首を今に伝えるが、やはり悼亡の詞ではない。

さらに、強至（一〇二二―一〇七六）にも、「辛卯（一〇五一）七夕悼往」という悼亡詩があり、詞は一首を伝えるが悼亡ではない。また、劉攽（一〇二三―一〇八九）も妻をなくして、「傷逝二首」がある。¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾

なお、劉攽の場合は詞を全く伝えていない。いまここに挙げた五人は、東坡の先輩の世代に属すが、いずれも悼亡詩を伝えながら、悼亡詞は伝えていないのである。彼らにとって、悼亡というテーマはやはり詩で歌うものであったと考えられる。換言すれば、悼亡は詩よりも詞で歌うのがふさわしいという意識が、当時一般的であつたとは考えられない。もしそうであるなら、右の五人に一首も詞による悼亡の作が伝わらないのは理解しがたい。とりわけて歐陽修のごときは、「述夢賦」という賦の形式による悼亡の作までがありながら、二百首余りの詞の中に悼亡の作が見当たらないのは、不思議なことといわねばなるまい。悼亡を詞で歌つたのは、実に東坡が最初であつた。それは、当時の一般的意識からの一種の跳躍であつた。では、東坡が悼亡を詞で歌つて以後、状況はどうなつたであらうか。

詩は悼亡というテーマを詞にゆずったであろうか。賀鑄（一〇五二—一二二五）に次のような詞がある。

半死桐

重過閨門萬事非 重ねて閨門を過ぎれば 万事非なり
同來何事不同歸 同に來るも 何事ぞ同に歸らざる
梧桐半死清霜後 梧桐半ば死せり 清霜の後
頭白鴛鴦失伴飛 頭白き鴛鴦 伴を失つて飛ぶ

原上草

原上の草

露初晞 露初めて晞く
舊棲新壠兩依依 旧棲と新壠と両つながら依依たり
空牀臥聽南窗雨 空牀 臥して聴く 南窓の雨
誰復挑燈夜補衣 誰か復た灯を挑げて 夜衣を補わん

鍾振振氏に拠れば、この詞は建中靖国元年（一一〇二）、蘇州にて

亡き妻趙氏を思つての作、つまり悼亡詞である。¹⁴したがって、賀鑄は悼亡を詞で歌っていることになるが、詩では歌わなかったのだろうか。

賀鑄の詩集は『慶湖遺老集』というが、今伝わる詩集に悼亡詩と認められる詩はない。しかし、もともと前後集合わせて二十卷あった詩集のうちで、元符二年（一一〇九）以後の詩を収めた後集は早くから散佚してしまっていて、現在伝わるのは前集のみであるので、¹⁵鍾氏のい

うように、右の詞が建中靖国元年の作で、趙氏の死がそのころとすれ

ば、後集に悼亡詩があった可能性はある。賀鑄に悼亡詩がなかったとは断言できない。とはいえ、賀鑄が詞で悼亡を歌ったという事実は認められるわけである。それでは、他の詞人も同様かといえ、決してそうではない。管見に拠れば、北宋の主だった詞人の中に悼亡詞を今に伝える人は、賀鑄のほかには見当たらないのである。¹⁶北宋においては、詩が悼亡というテーマを詞にゆずってしまったとはいえないと思う。逆に、東坡の後輩の中にも、悼亡詩の存在を指摘できる例はある。たとえば、賀鑄と同世代の張耒（一一〇五—一一一四）の文集に、¹⁷

「悼亡九首」及び「悼逝」という悼亡詩が見えるのが、それである。

張耒はいわゆる蘇門四学士のひとりで、詞もわずかながら六首を今に伝える。しかし、いずれも悼亡の詞ではない。張耒もおそらく悼亡詞を作らなかつたと思われる。

以上、北宋においては、東坡の先輩の世代であれ後輩の世代であれ、詩が悼亡というテーマを詞にゆずってしまったということはなさそうである。¹⁸悼亡は詩で歌われるものというのが、やはり一般の認識であったと考えるべきであろう。その中で、東坡ひとりか悼亡は詩ではなく詞にふさわしいと認識していたのであろうか。おそらく、そうではないだろう。東坡も悼亡は通常は詩に歌われるべきテーマだと考えていたのだと思う。東坡が悼亡を詞で歌ったのは、詞及び悼亡に対する、当時の一般的認識が然らしめた結果では、おそらくない。

(二)

一般に、中国の詩人たちは、妓女を除くと、いわゆるかたぎの女性

への恋情を率直に歌うことには、極めて消極的であつた。また、たとえ対象が妓女であつても、あまりほめられたことではなかつたといえる。その唯一の例外ともいえるのが、正式の妻を対象とした詩、なかでも悼亡詩であつた。⁽¹⁹⁾ 悼亡はすぐれて個人的で重いテーマであるが、同時に対社会的にも重いテーマであつたと思われる。いわば公的なテーマでもあるのだ。儒家の倫理観を背負つていた士大夫にとって、悼亡とは、対象である亡き妻への心情の実際はどうであれ、公的には、妓女や侍妾への愛情の表白と比べればずっと重いテーマであつたろう。それを、宴席の歌謡から発達し、妓女への恋情をしばしばあからさまに歌つてきた（これも古くは詩が担つてきたものだが）詞という形式に盛り込むのは、士大夫にとって抵抗感があつたはずである。すでに述べたように、北宋においては詩が悼亡を詞にゆずつたとは考えられないし、東坡以前に詞による悼亡の作が残されていないのも、そうした抵抗感ゆえのことだと考えられる。悼亡とは、逆説的になるが、おそらく最も詞に取り入れにくいテーマであつたのだ。では、東坡があえて悼亡を詞に歌つたのはどう考えればよいのだろうか。ここで、「江城子」制作前後の東坡の詞に対する認識と詞作の状況を見てみよう。まず、東坡の詞に対する基本的な認識は、たとえば次のような資料から窺えるだろう。

又惠新詞、句句警拔、詩人之雄、非小詞也
又了新詞を恵まる、句句警拔にして、詩人の雄たり、小詞に非ざるなり

蘇東坡の悼亡詞について

比雖不作詩、小詞不礙、輒作一首、今錄呈、爲一笑
比^{このころ}詩を作らずと雖も、小詞は礙げず、輒ち一首を作れり、今録して呈し、一笑と爲さん

（與陳大夫書）

いずれも元豐三年（一〇八〇）から元豐七年にかけての黃州時代の書簡の一節である。ここで注意したいのは、詩に對して、詞を「小詞」といつていることである。詞は詩に比べれば、やはり「小」という形容の付く軽いものであつたのである。また、黃州は東坡の流謫の地で、その原因は周知の筆禍事件であつた。東坡の詩文が朝政を誹謗したとされたのだが、右の書簡に「比詩を作らず」というのも、それを意識してのことであろう。しかし、「小詞は礙げず」なのである。これは、詩は公的な發言とみなされやすいが、詞はそれほどでもないという意識から來ることばであろう。⁽²⁰⁾ さらに、次のような資料もある。

題張子野詩集後

張子野詩筆老妙、歌詞乃其餘技耳、……、若此之類、皆可以追配古人、而世俗但稱其歌詞、昔周昉畫人物、皆入神品、而世俗但知有周昉士女、皆所謂未見好德如好色者歟、
元祐五年四月二十一日
張子野は詩筆老妙たり、歌詞は乃ち其の余技のみ、……、此くの若きの類は、皆以て古人に追配すべし、而も世俗は

但だ其の歌詞のみを称す、昔周昉人物を画きて、皆神品に入る、而も世俗は但だ周昉の士女有るを知るのみ。皆所謂未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ずなるか、元祐五年四月二十一日

元祐五年とは一〇九〇年、張子野とはすなわち張先で、東坡の詞作に影響を与えた詞人として有名である。これは張先の詩集に題したもののだが、みな張先の詞ばかりをはめるが、その本領は詩にあり、詞は詩に比べれば余技にすぎない、と東坡はいうのである。また、『論語』に見える有名なことば「吾未見好徳如好色者也」を引きあいに出して、「徳」詩、「色」詞」という図式を呈示してみせるのも、詞はやはり詩に比べれば一段低い文学なのだという東坡の認識、少なくとも公的な認識を示している。それでは次に、「江城子」を作った密州時代の前後、東坡の詞作はどのようなものであったかを見てみよう。

東坡が新しい韻文形式である詞の制作に積極的に取り組みはじめたのは、熙寧四年（一〇七二）に杭州の副知事となつてからである。杭州には張先が隠居しており、東坡はその影響を受けたとされる。⁽²¹⁾しかし、杭州時代は比較的作るのがやさしい小令ばかりを作っていたように、いわば習作の時代であつた。本格的な長篇形式である慢詞を作りはじめ、かつ作品の内容にも独自の広がりを示すのは、実は熙寧七年（一〇七四）に密州の知事にうつる頃から黃州流謫時代にかけてである。「密州に赴かんとして早つとに行ち、馬上にて子由に寄す」という小題をもつ「沁園春」は、弟蘇轍に寄せたものだが、当時王安石によつ

て始められていた新法に対する不満を込めている。⁽²²⁾さらに、東坡は詞という形式を用いて狩獵のさまを歌い、農村をスケッチし、⁽²³⁾三国時代の赤壁の戦いを懷古するなど、⁽²⁴⁾それまでもつぱら詩によつて歌われていた題材を詞に取り入れたのである。つまり、東坡はそれまで男女の恋情を主たる題材としていた詞の世界を拡大して、詩に重ね合わせようとしたのだといえる。そして、東坡がみずからのこうした作風をはつきりと意識しており、さらには一定の自負を抱いていたことを示すのが、密州時代、さきにふれた狩獵を歌つた詞を作ったときに書かれたと思われる、次の書簡である。

（前略）近却頗作小詞、雖無柳七郎風味、亦自是一家、呵、數日前、獵於郊外、所獲頗多、作得一闋、令東州壯士抵掌頓足而歌之、吹笛擊鼓以爲節、頗壯觀也、寫呈取笑近ごろ却つて頗る小詞を作る、柳七郎の風味無しと雖も、亦た自おのづからはれ一家なり、呵呵、數日前、郊外に獵し、獲る所頗る多し、作りて一闋を得たり、東州の壯士をして掌を抵ち足を頓ふみならしてこれを歌わしめ、笛を吹き鼓を撃ちて以て節を為せば、頗る壯觀なり、写して呈して笑いを取らん

（與鮮于子駿書）

柳七郎とは柳永、著名な詞人で男女の恋情を歌う作品が多く、総じて艶冶で感傷的な作風をもつ。いわば詞の本色を代表する詞人であつ

た。その柳永と対比して、「自らはれ一家なり」というのは、東坡のみずからの詞風に対する自負の表明といえるだろう。すなわち、柳永のように詞の本色というべき詞風ではないが、おのれの作る作品も立派な「詞」なのだという自負である。⁽²⁶⁾

密州から黄州にかけての時代は、東坡がかなり意識的に詞の革新者たらんとした時期であつたと思う。東坡が密州時代に、亡き妻王氏への思いを伝統的な詩という形式ではなく、詞という新しい形式で歌つたということは、右のような脈絡の中で捉えねばならない。東坡は詞が悼亡というテーマにふさわしいからというのではなく、伝統的には詩で歌われるべき悼亡というテーマが、詞という新しい韻文形式でも歌えることを示そうとしたのである。「江城子」は、悼亡詩の歴史においても画期的な作品であつた。

(四)

東坡の悼亡詞「江城子」については、さらに梅堯臣の悼亡詩の存在を見逃すことはできない。「江城子」の小題は、「乙卯正月二十日夜夢を記す」というものであつた。つまり東坡は亡き妻を夢に見て、そのことを歌っているわけである。このように亡き妻を夢に見たことを歌うのは、唐の韋応物からといわれるが、⁽²⁷⁾梅堯臣の一連の悼亡詩の中には夢を歌つたものが実に多いのである。それは「来夢」「夢感」など十一首にものぼる。⁽²⁸⁾そして、その中に次のような詩がある。

戊子正月二十六日夜夢

自我再婚來 我れ再婚して自り來^{このかた}

二年不入夢 二年 夢に入らず

昨宵見顔色 昨宵 顔色を見

中夕生悲痛 中夕 悲痛を生ず

暗燈露微明 暗灯 微明を露わし

寂寂照梁棟 寂寂として梁棟を照らす

無端打窗雪 端無くも 窓を打つ雪の

更被狂風送 更に狂風に送らる

(宛陵集卷三十一)

詩題にいう「戊子」とは、慶暦八年（一〇四八）である。すなわち妻謝氏をなくしてから四年後、再婚して後妻刁氏を娶ってからは二年後の作になる。詩は、再婚して新しい妻との生活を始めてからは夢に見ることのなかった前妻謝氏を、二年ぶりにふと夢に見たときの悲哀を歌う。その詩題「戊子正月二十六日夜夢」が、東坡の「江城子」の小題「乙卯正月二十日夜記夢」と非常によく似ているのである。そればかりではない。実は東坡も妻王氏（通義君）をなくしてから三年後の熙寧元年（一〇六八）に、王氏のいとこで同じく王氏（同安君）の後妻としてゐる。東坡が「江城子」を作った当時、後妻の同安君はもちろん東坡のかたわらにいた。⁽²⁹⁾東坡の小題が梅堯臣の詩題に酷似しているばかりではなく、作品が作られた状況も同じなのである。通義君を失ってから十年、後添えの同安君を娶ってから七年後の「乙卯正月

二十日夜」、おそらく梅堯臣と同じように、しばらく夢に見ることのなかった前妻通義君を夢に見て、東坡は梅堯臣の「戊子正月云々」の悼亡詩を思い起こしたに違いない。というのも、梅堯臣は著名な詩人であつたのみならず、すでに触れたように、東坡にとっては師でもあつたからである。⁽³⁰⁾ 管見では、梅堯臣に触れた東坡の文章の中に直接その悼亡詩に言及したものはないが、東坡は梅堯臣の一連の悼亡詩を知つていたと考えてよいだろう。「自我再婚來、二年不入夢、昨宵見顏色、中夕生悲痛」という梅詩の四句は、まさに東坡の思いそのままではなかつたか。

また、すでに触れたように、歐陽修にもやはり亡き妻胥氏を夢に見ての「述夢賦」がある。その歐陽修が梅堯臣の求めに応じて、その妻謝氏の墓誌銘を書いているのであるが、その中に梅堯臣が語るかたちで、謝氏の生前の賢明さを示すエピソードがしるされている。それがまた、東坡が通義君のために書いた墓誌銘の中の一節とよく似ているのである。⁽³¹⁾ このことも、悼亡をめぐる東坡と梅堯臣とのつながりを思わせるのである。

詞は本来詞牌を掲げるのみで、小題を添えることはなかつた。詞は歌謡であるから、その内容は必ずしも特定の個人や事件に限定して理解されるものではなく、一般性をもつといえる。したがって、東坡が「江城子」を作ったとき、悼亡という一面ですぐれて個人的なテーマを、歌謡の一般性といったものの中へと流してしまいたくはなかつた。だから「乙卯正月云々」の小題を添えたのだ、とも考えられる。⁽³²⁾ つまり悼亡は詞で歌うのがふさわしい。しかし、詞という歌辞文芸の

もつ一般性の中へ王氏への思いを流してしまいたくはなかつた。そこで「乙卯正月云々」の小題を添えた、ということになる。しかし、梅堯臣の悼亡詩とのつながりを考えれば、おそらく東坡は、「乙卯正月云々」の小題を添えることによって、「江城子」を詞のかたちをとつた「悼亡詩」として明示したのである。歌謡の一般性に流されるのを引き止めるために制作の日付を小題として添えるという、消極的な意図ではなく、詞という新しい韻文形式をもつて悼亡を歌うのだという、積極的な意図をもつていたのだと考えるのである。⁽³³⁾ では、東坡はなぜ亡き妻を悼むことをもつとはつきりと示す小題、たとえば「悼亡」や「傷逝」などにしなかつたのであろうか。それは次のように説明されるだろう。悼亡詩において、「悼亡」や「傷逝」などという直接的な題は、妻の死から程遠からぬ時期に作られたものにふさわしい。潘岳然り。また梅堯臣然りである。⁽³⁴⁾ 妻を失つた悲しみが時の流れの漂白にさらされて薄れ、その底部に伏在するようになってからの題にはなりにくいと思われる。東坡が「江城子」を作つたのは、通義君の死後十年、同安君との再婚後七年の歳月を経てからであつた。時の流れの底部からふと湧き上つた悲しみ、それが東坡の悲しみであつたのだ。⁽³⁵⁾

おわりに

詞という、いわば軟文学であることを本色とする韻文形式に、おそらく最も取り入れにくい悼亡というテーマ、それを詞でも歌えることを示したのが東坡の「江城子」であつた。それは、東坡の密州時代における詞作に対する意欲の表われのひとつであるとともに、潘岳以来

の長い伝統をもつ悼亡詩に、新たな形式を導入しようとする意欲の表われでもあった。そして、東坡の王氏への思いの深さと細やかさが、そのことによっていささかも減じていないことは、「江城子」という作品自体が証明している。

附記

小論は、一九八九年一月二六日、第三十八回高知大学国語国文学会における発表をもとにして成ったものである。なお、東坡の文は『蘇軾文集』（中華書局、一九八六）に拠った。

註

- (1) 東坡の「亡妻王氏墓誌銘」にいう。
治平二年五月丁亥、趙郡蘇軾之妻王氏、卒於京師、六月甲午、殯于京城之西、其明年六月壬午、葬於眉之東北彭山縣安鎮鄉可龍里先君先夫人墓之西北八步
- (2) 潘岳から元稹までの悼亡詩の流れを論じたものに、入谷仙介氏「悼亡詩について——潘岳から元稹まで——」（入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集、一九七四）がある。
- (3) たとえば、村上哲見氏「詩と詞のあいだ——蘇東坡の場合」（『東方学』第三十五輯、一九六八、のちに『宋詞研究・唐五代北宋篇』に収録）、野口一雄氏「東坡詞題注小考」（『文哲文学会報』第三号、一九七八）。
- (4) 佐藤保氏「宋詩における女性像および女性観」（中国文学の女性像、一九八二、汲古書院）。
- (5) 梅堯臣の悼亡詩についての専論としては、森山秀二氏「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二十六号、一九八八）があるので参照されたい。

蘇東坡の悼亡詞について

- (6) 「胥氏夫人墓誌銘」（居士外集卷十二、四部叢刊本）を参照。
長篇だが、ほぼ全篇を挙げておく。

- (7) 夏竦解擲陰加樛 臥齋公退無喧囂 清和況復值佳月 翠樹好鳥鳴咬咬 芳緯有酒美可酌 胡爲欲飲先長謠 人生暫別客秦楚 尙欲泣淚相攀邀 況茲一訣乃永已 獨使幽夢恨蓬蒿 憶予驅馬別家去 去時柳陌東風高 楚鄉留滯一千里 歸來落盡李與桃 殘花不共一日看 東風送哭聲嗷嗷 洛池不見青春色 白楊但有風蕭蕭 …………… 吾聞莊生善齊物 平日吐論奇牙聲 憂從中來不自遣 強叩瓦缶何饒詭 伊人達者尙乃爾 情之所鍾況吾曹 愁填胸中若山積 雖欲強飲如沃焦 乃判自古英壯氣 不有此恨如何消 又聞浮屠說生死 滅沒謂若夢幻泡 前有萬古後萬世 其中一世獨匆匆 安得獨灑一榻淚 欲助河水增滔滔 古來此事無可奈 不如飲此罇中醪（居士外集卷二）
- (8) 「祭亡妻晁氏文」（元豐類藁卷三十八、四部叢刊本）、「又祭亡妻晁氏文」（同前）及び「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」（卷四十六）を参照。
- (9) 他に悼亡詩と認められるものに、「合醬作」（卷四）、「鄆口」（卷五）がある。後者には自注があり、「昔與宜興君同過此」という。本文は次の通り。

- (10) 憶共佳人曝繡衣 餘香如昨舊歡非 鵲橋雖別年年在 猶勝嬌魂去不歸（祠部集卷十二、四庫全書本）
なお、「賞春」（卷七）の自注に、「予近喪偶」とある。また、「篋中得調官時楊氏所寄書、慨然追感」と題する七律（卷十）があり、次のように歌う。

- (11) 笑語無蹤莫更尋 每懷平昔恨猶深 況看滿幅相思字 曾訴幽閨獨自心 因想音容如在目 不知涕淚已盈襟 恨銷除是絲縑滅 弗比遺香苦易沈
これもやはり亡妻楊氏を追憶した悼亡の詩である。詳しくは、清、強汝詢「祠部公年譜」（求益齋文集卷八）を参照。

- (12) 「祭亡妻穎陽縣君韓氏文」（彭城集卷四十、四庫全書本）を参照。

(12) いま、その第一首を挙げておく。

去水不可還 逝者日已疎 悲憂若沈痼 百藥無能除 英英韶華子
天天昔同車 令德其芬芳 佩玉聯瓊瑤 舟移悼藏壑 天祝嗟愁予
蕙蘭秀不實 徒見荆棘墟 含悽撫衆稚 弔影還室廬 高天香茫茫
日月空居諸(彭城集卷六)

(13) 全文を挙げておく。

夫君去我而何之乎 時節逝兮如波 昔共處兮堂上 忽獨棄兮山阿
嗚呼 人羨久生 生不可久 死其奈何 死不可復 惟可以哭 病予
喉使不得哭兮 沉欲施乎其他 憤既不得與聲而俱發兮 獨飲恨而悲
歌 歌不成兮斷絕 淚疾下兮滂沱 行求兮不可遇 坐思兮不知處
可見惟夢兮 奈寐少而寤多 或十寐而一見兮 又若有而若無 乍若
去而若來 忽若親而若疏 杳兮倏兮 猶勝于不見兮 願此夢之須臾
尺蠖憐予兮爲之不動 飛蠅閔予兮爲之無聲 冀駐君兮可久 悅予夢
之先驚 夢一斷兮魂立斷 空堂耿耿兮華燈 世之言曰死者漸也 今
之來兮是也非也 又曰覺之所得者爲實 夢之所得者爲想 苟一慰乎
予心 又何較乎真妄 綠髮兮思君而白 豐肌兮以君而瘠 君之意兮
不可忘 何憔悴而云惜 願日之疾兮 願月之遲 夜長于晝兮 無有
四時 雖音容之遠矣 于恍惚以求之(居士外集卷八)

(14) 『東山詞』(鍾振振校注、一九八九、上海古籍出版社、二十五頁参照。

(15) 『四庫提要』参照。

(16) 北宋の惠洪の『冷齋夜話』卷三に、李元膺が悼亡の詞を作ったという
次のような記事が見える。

許彥周曰、李元膺作南京教官、喪妻、作長短句曰、去年相逢深院宇、
海棠下、曾歌金縷、歌罷花如面、翠羅衫上、點點紅無數、今歲重尋
攜手處、物是人非春莫、回首青門路、亂紅飛絮、相逐東風去、李元
膺尋亦卒

しかし、この記事には疑問が残る。詞の内容からいうと、なくなった女性
性を歌ったとは思えない。唐の崔護の有名な七絶「都城南莊に題す」
の焼き直しに見えるからである。また、よしんばなくなった女性を歌つ

たものだとにしても、妻というよりは、妓女が対象だと思われる。なお、
李元膺は蔡京と同時の人という。

(17) 「悼亡九首」は七絶の連作で、「悼逝」は五古。いずれも『張右史文
集』卷三十六(四部叢刊本)に見える。いま、「悼逝」を挙げておく。

結髮爲夫婦 少年共飢寒 我迂趨世拙 十載困微官 男兒不終窮
會展凌風翰 相期脫崎嶇 一笑紆艱難 秋風摧芳蕙 既去不可還
滴我眼中血 悲哉摧肺肝 兒稚立我前 求母夜不眠 我雖欲告之
哽咽不能言 積金雖至斗 紆朱走華軒 失我同心人 撫事皆悲酸
積日而成時 積時更成年 山海會崩竭 音容永茫然

ただし、張耒の妻の姓や没年などについては未詳。博雅の御指教を請う。
なお、清の邵祖濤に『張文潛先生年譜』があるとのことであるが、未見。

(18) 南宋については、ほとんど未調査なので言及は避けた。ただ、劉克
莊に「福清道中作」との小題をもつ「風入松」二首、及び「癸卯至石塘
追和十五年前韻」の小題をもつ和作二首があつて、錢仲聯氏の『後村詞
箋注』(上海古籍出版社、一九八〇)によれば、亡き妻林氏を思う悼亡
の詞である。南宋では、北宋よりも多くの悼亡詞を見出せるかも知れな
い。しかし、悼亡詩が作られなくなったということはない。同じ劉克莊
に「石塘感舊十首」という連作の詩がある(後村先生大全集卷十六、四
部叢刊本)。いま、その第一首と三首を挙げてみる。

鹿門陳迹有餘哀 猶記龍公返自涯 行到當時相送處 不知老淚自何
來(自注云、余往來甥館、舅未嘗相送、惟戊子悼亡而歸、送至延慶)
沈郎院閉綵雲收 寂寞秋花折樹頭 留取斷絃來世續 此生長抱百年
愁

これはやはり悼亡の詩とみなすべきであろう。また、劉克莊の『後村詩
話』には次のような記事がある。

李雁湖悼亡云、一杯謾遣愁能遣、幾度醒來錯喚君、然元稹已云、怪
來醒後侍人泣、醉裏時時錯問君、此猶是暗合、若四靈墓碑入宋稀、
與唐人隋柳入唐疎之句、則是明犯(前集卷二)
悼亡之作、前有潘騎省、後有韋蘇州、又有李雁湖、不可以復加矣

(後集卷二)

李雁湖とはすなわち李壁、『統資治通鑑長篇』の著者李燾の子でもある。劉克莊は李壁の悼亡詩を、潘岳と韋応物とともに高く評価しているのである。ただし、李壁の『雁湖集』は散佚していて、その悼亡詩の全篇は伝わっていないようである。ちなみに、李壁の詞は十首伝わるが、いずれも悼亡詞ではない。さらにいえば、戴復古に「題亡室真像」と題する悼亡詩があるが、『全宋詞』に収められる四十六首の詞の中に悼亡の作はない。以上のことから、南宋においても、詩が詞に悼亡というテーマをゆずってしまったということはないのではないか、と今のところは予想している。

(19) 小論という悼亡詩（悼亡詞）とは正妻を対象としたものを指す。妓女や侍妾を対象とした作品も悼亡とよぶことはあるが、ここでは含めない。妓女や侍妾は、公的には正妻とはつきり一線を画される存在であらう。潘岳以来の悼亡詩の伝統の中に、妓女や侍妾の死を悼んだ作品までも含めるのは妥当性を欠くと思う。柳永に「離別難（花謝水流倏忽）」、晁端礼に「滿庭芳（淺約鴉黃）」、晁補之に「青玉案（彩雲易散琉璃脆）」、傷娉婷」があつて、いずれもなくなった女性を悼むが、その対象は遊里の妓女や家妓に相違なく、これらを悼亡詞とみなさないのが小論の立場である。

(20) 『東坡烏臺詩案』（函海本）を見ると、東坡の詩や文はいくつもやり玉にあがつているが、詞は二、三挙げられているものの、直接その中の句が云々されることはない。また、のちに触れる「沁園春」もやり玉にあげられてよさそうだが、『詩案』には見えない。

(21) 張先及び東坡の詞については、村上哲見氏『宋詞研究——唐五代北宋篇』などを参照されたい。

(22) その後閨を挙げておく。

當時共客長安 似二陸初來俱少年 有筆頭千字 胸中萬卷 致君堯舜 此事何難 用舍由時 行藏在我 袖手何妨閒處看 身長健 但優游卒歲 且鬪樽前

蘇東坡の悼亡詞について

(23) 「密州出獵」と題する「江城子」（『東坡樂府箋』に拠る）である。

老夫聊發少年狂 左牽黃 右擎蒼 錦帽貂裘 千騎卷平岡 爲報傾城隨太守 親射虎 看孫郎 酒酣胸膽尚開張 鬢微霜 又何妨 持節雲中 何日遣馮唐 會挽雕弓如滿月 西北望 射天狼
(24) 「徐門的石潭に雨を謝する道上の作五首云々」の小題をもつ「浣溪沙」の連作で、元豐元年（一〇七八）、徐州での作。いまその第四首を挙げておく。

簌簌衣巾落棗花 村南村北響鵲車 牛衣古柳賣黃瓜 酒困路長惟欲睡 日高人渴漫思茶 敲門試問野人家

(25) 「赤壁懷古」と題する「念奴嬌」で、黃州時代の作。あまりに有名なので引用は省略する。

(26) 熙寧九年（一〇七六）、密州での詩に「答李邦直」（蘇文忠公詩合註卷十四）がある。李邦直とはすなわち李清臣のことで、當時京東路提刑として徐州にあつた。東坡はその詩の末尾で、「閑子有賢婦、華堂詠螽斯、曷不倒囊囊、賣劍買蛾眉、不用教絲竹、唱我新歌詞」と歌っている。すなわち、聞けばあなたには賢婦人があつて、子孫の多きを願っているとか、財布をはたいて美人を買うことです、そしたら楽器を仕込むに及びません、私の新作の歌を歌わせるのです、というのである。詩全体に李清臣に対する軽い戯れの調子はあるが、末二句からは、当時東坡がみずからの詞作にかなり自信を抱くようになっていたことが窺える。

(27) 注②入谷論文。

(28) 注⑤森山論文参照。

(29) 「江城子」が作られたと同じ熙寧八年（一〇七五）に、「小兒」（蘇文忠公詩合註卷十三）と題する次のような詩がある。

小兒不識愁 起坐牽我衣 我欲噉小兒 老妻勸兒癡 兒癡君更甚 不樂愁何爲 還坐愧此言 洗盞當我前 大勝劉伶婦 區區爲酒錢
この詩で、その賢明さを東坡から感謝されているのが同安君である。科舉及第後、東坡が梅堯臣に宛てた書簡の中には次のようにいう。

(30) 軾七八歲時、始知讀書、聞今天下有歐陽公者、其爲人如古孟軻、韓

愈之徒、而又有梅公者從之遊、而與之上下其議論、其後益壯、始能讀其文詞、想見其爲人、意其飄然脫去世俗之樂而自樂其樂也、方學爲對偶聲律之文、求斗升之祿、自度無以進見於諸公之間、來京師逾年、未嘗窺其門、今年春、天下之士羣至於禮部、執事與歐陽公實親試之、誠不自意、獲在第二、……、而嚮之十餘年間、聞其名而不得見者、一朝爲知己、退而思之、人不可以苟富貴、亦不可以徒貧賤、有大賢焉而爲其徒、則亦足恃矣、……、執事名滿天下、而位不過五品、其容色溫然而不怒、其文章寬厚敦朴而無怨言、此必有所樂乎斯道也、軾願與聞焉（上梅直講書）

また、梅堯臣の詩への題跋に、

吾雖後輩、猶及與之周旋、覽其親書詩、如見其抵掌談笑也（題梅聖俞詩後）

とあり、さらには、

先君與聖俞游時、余與子由年甚少、世未有知者、聖俞極稱之（書聖俞贈歐陽閔詩後）

ともいう。

(31) 該当部分の原文は次の通り。

吾嘗與士大夫語、謝氏多從戸屏竊聽之、聞則盡能商榷其人才賢否及時事之得失、皆有條理（南陽縣君謝氏墓誌銘、居士集卷三十六）
軾與客言於外、君立屏間聽之、退必反覆其言曰、某人也言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言（亡妻王氏墓誌銘）

これはすでに清水茂氏に指摘がある。『唐宋八家文』（朝日新聞社、中国古典選）参照。

(32) 注③野口論文参照。

(33) このことは、注②入谷論文が元稹の悼亡詩について、潘岳以来の五言古詩ではなくて、七言律詩という「もつとも新しく成立した、もつとも唐代的な詩形」を用いたのを、元稹の悼亡詩の詩形に対する意欲の表われであり、「破天荒な試み」とするのにつながるであろう。

(34) 潘岳の「悼亡」は妻の死の翌年（高橋和巳氏「潘岳論」中国文学報第

七冊参照）、梅堯臣の「悼亡」は妻の死の年（注⑤森山論文参照）の作である。また、韋応物の悼亡詩は十九首の連作であるが、その最初に置かれるのが「傷逝」である。注②入谷論文には、

十九首は視座の変化のみでなく、時間の推移にもなる感情の密度の変化とも対応する。死者に対する哀悼の感情は、いうまでもなく死の直後にもつとも密度が高く、時間を経過するにつれて薄れるのが人情の自然であろう。十九首の排列は「傷逝」を頂点として、感情がしだいに下り坂になってくるのが見られる

という。管見では、「傷逝」から「秋夜二首」までの十七首は、妻の死（冬）から翌年の秋までの一年間の時間の推移に従って詠まれている。

これは潘岳の「悼亡」三首の構成にならったものであろう。「感夢」についてははっきりしないが、おそらく「秋夜二首」より後の作であろう。最後の「同德精舍舊居傷懷」のみが、妻の死の一年後以降、同德精舍の旧居に帰った作ではないかと思う。なお、韋応物の悼亡詩については、深沢一幸氏の「韋応物の悼亡詩」（『颯風』第五号）を参照されたい。

(35)

以上は、詩人東坡（詞の作家であることも含める）という観点から論じたのであり、これに生身の生活者東坡という観点を加えれば、「乙卯正月二十日夜記夢」という小題には、継室同安君への心遣いがあったと考えることもできる。東坡の同安君への心情の一端は、すでに注②で触れたところである。ただ、東坡の同安君への心遣いをいうなら、小題よりも詞の本文の方に窺えるのではないだろうか。それは梅堯臣と比べた場合なのだが、梅堯臣の「戊子正月二十六日夜夢」の初句「自我再婚來」は、夢に見たのが前妻であることを、東坡の「江城子」に比べればずっとあからさまに示している。また、梅堯臣は後妻として「丁氏を娶ったときに「新婚」（宛陵先生集卷二十八）と題する詩を作っているが、その中で「前日新婚を為し、今を喜び復た昔を悲しむ」、「呼ぶに慣れて猶お口誤まり、往に似て頗る心積もる」と歌い、前妻謝氏への思いを隠さない。とくに「呼ぶに慣れて猶お口誤まる」とは、謝氏への心情の表現として心を打つものがあるが、生身の生活者の立場に立てば、後妻

刁氏への配慮に欠けているという非難もありうるだろう。梅堯臣の場合は、前妻謝氏への心情を吐露することの方にかなり傾斜している。東坡の「江城子」は、詩人東坡と生活者東坡の微妙なバランスの上に成り立った作品といえるかも知れない。